

【研究ノート】

認知症カフェにおける体験型芸術文化活動に関する一考察

古賀 弥生

要約

認知症カフェは認知症の人をサポートするだけでなく認知症フレンドリーな地域づくりを志向するものである。近年、事例の蓄積が見られる芸術文化活動による認知症の人々への働きかけは、認知症カフェにおける地域づくりにも貢献できるのだろうか。本稿では、福岡市東区内で開催されている認知症カフェにおける芸術ワークショップの事例をもとに考察する。この事例では、芸術ワークショップの実施が認知症患者である個人への働きかけと、認知症の人と介護者の間の相互作用に加え、ボランティア・地域住民等のコミュニケーションや理解を促進し「当事者」感覚を有する人を増やすことに貢献しており、地域づくりにつながる可能性が指摘できる。

Keyword

認知症カフェ, 芸術ワークショップ, 認知症フレンドリー, パーソンセンタードケア

1. 研究の目的

超高齢化社会を迎え、高齢者を対象とした芸術文化活動の実践及び研究事例も増加しつつある。特に認知症患者である高齢者への芸術文化活動による働きかけについては、一定程度の事例の積み重ねと成果検証も行われ、一部には医学的な面から認知症に伴う不安やうつなどの行動・心理症状（BPSD）の軽減に成果があるとの報告もある¹。

認知症ケアの領域では、患者本人や家族が相互に関わって行われるピアサポートと、地域社会による認知症への理解を深め地域づくりの両面が必要であるとされており²、近年、各地域で開催されるようになった認知症カフェも、この両方に関わるものと理解できる。

これまでBPSDの軽減等、本人や家族など個人に対する効果の面から語られることが多かった認知症と芸術文化活動の関わりを、地域づくりの側面からも捉えることが可能か。本稿はこの点について認知症カフェにおける事例を通じた考察を試みる。

2. 我が国における認知症施策と認知症カフェの位置づけ

我が国において、2012年時点で認知症の人の数は約462万人、軽度認知障害の人の数は約400万人と推計され、合わせると65歳以上高齢者の約4人に1人が認知症又はその予備軍とも言われていた。2018年には認知症の人の数は500万人を超え65歳以上高齢者の約7人に1人が

¹ 一例として後述の演劇情動療法などが挙げられる。

² 矢吹・ミーセン（2018）は「認知症カフェは、人と地域を変えていくものである」ことを前提としている（p ii 参照）。

認知症と見込まれている³。

本章ではこうした状況を背景として、認知症に対応する施策の状況と、そのなかで認知症カフェがどのように位置づけられているのかを確認したうえで、認知症カフェの特徴を整理する。

2.1 我が国の認知症施策と認知症カフェ

認知症に関する我が国の施策は、厚生労働省を中心とした関係省庁により2018年6月、「認知症施策推進大綱」としてまとめられている。従来、認知症高齢者を対象とした施策は2012年「認知症施策推進5か年計画」（オレンジプラン）、2015年「認知症施策推進総合戦略」（新オレンジプラン）により進められていたが、2018年の大綱はこれらの施策も含めて推進されているものである。

認知症カフェは新オレンジプランにより位置付けられた後、引き続き大綱のなかでも「認知症の人やその家族が地域の人や専門家と相互に情報を共有し、お互いを理解し合う場である認知症カフェを活用した取組を推進し、地域の実情に応じた方法により普及する」とされており、KPI（目標値）として2020年度末までに認知症カフェを全市町村に普及させることが挙げられている。2019年度実績調査結果によると47都道府県1,516市町村で7,988カフェが運営されているという。設置主体は介護サービス施設・事業者、地域包括支援センターが多く、月に1～2回程度の頻度で1回2時間程度、多くは通所介護施設や公民館等を会場とし、活動内容は特別なプログラムを用意せず、利用者が主体的に活動しており講話や音楽イベントなどを開催している場合もあるとされている⁴。

2.2 認知症カフェと他の集まりとの違い

認知症患者とその家族が集まる場合は、認知症カフェが広がる以前からさまざまなものがあつた。例えば、認知症の人たちによる「本人ミーティング」、家族も含めた「つどい」、あるいは認知症に限定しない高齢者の集まる場として「サロン」など、さまざまな場所や名称で実施されてきた⁵。これら既存の場と認知症カフェとの違いは、「認知症」というキーワードのもと、患者と家族だけでなく地域の誰もが当事者として認知症への理解を深め、障害や困難があっても安心して暮らし続けることができるまちづくり、つまり認知症フレンドリーな地域づくりのための集まりであるという点である。

地域づくりのための集まりという点では、地域住民の交流や情報発信、地域コミュニティ活性化の活動拠点などとして開かれるコミュニティカフェと類似した面があり、認知症カフェは

³ 2018年6月、認知症施策推進関係閣僚会議が定めた「認知症施策推進大綱」による。

⁴ 厚生労働省ホームページ参照。

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000076236_00006.html#%E8%AA%8D%E7%9F%A5%E7%97%87%E3%82%AB%E3%83%95%E3%82%A7

⁵ 矢吹・ミーセン（2018）p98 参照。

「認知症」という課題に特化したコミュニティカフェであるといえるかもしれない。

3. 認知症ケアにおけるパーソンセンタードケアの考え方

本稿では、認知症カフェを舞台として行われる芸術文化活動が、直接的な対象者である個人の変容を促す側面と同時に、地域社会の変化に影響を及ぼす可能性に言及することを目的としている。

個人の変容と地域社会の変容をどのようにつなぐのか、ここで詳細に踏み込むことはできないが、個人と個人の間で起こる相互行為を広げていくことで多くの個人が変容しそれが地域社会を変えていく可能性がある、と捉えたい。そして、まずは個人の変容を芸術文化活動によって促すことはできるのか、それを拡大して地域社会の変容につなげることが可能か、という順で検討していく。

まず、認知症の人のケアに関わる領域で介護者と被介護者の個人間に起こることはどのように整理されているのか。

認知症の人を「認知症」の人、ではなく、認知症の「人」と見る、つまり「その人らしさ」を中心に置いた接し方の概念であるパーソンセンタードケアを提唱したキットウッドは、ケアに関わる12の相互行為を挙げている⁶。以下、キットウッドによる12の相互行為について列記する⁷。

キットウッドによる12の相互行為

1. 認めること（名前と呼ばれかけがえのない存在として肯定されること）
2. 交渉（本人の好みや望み、どうしたいのかニーズを聞くこと）
3. 共同（家事や身の回りのことを一緒に行うこと）
4. 遊び（自発的に自己を表現する行為）
5. ティマレーション（アロマセラピーやマッサージを通して感覚に訴えること）
6. お祝い
7. リラクゼーション
8. バリデーション（その人の主観的現実を受け止め寄り添うこと。例：介護者を母親と認識している様子なら、母として振る舞うなど）⁸

⁶ キットウッド（高橋訳）（2017），p158-163 参照。

⁷ カッコ内はキットウッド（高橋訳）（2017）を参考に筆者が加筆。太字については後述。

⁸ 認知症の人へのこのような対処法は、俳優で介護福祉士でもある菅原直樹（老いと演劇 OiBokkeShi）が全国で行っている「老いと演劇ワークショップ」のコンセプトに近く、演劇との親和性が指摘できる。老いと演劇 OiBokkeShi <http://oibokkeshi.net/>

9. 抱えること（抱きかかえること）
10. ファシリテーション（できない部分のみを援助し共同につなげていくこと）
11. **創造的行為**（社交的な場面で何かを提供すること。例：他人を誘って歌い始める、踊り始める）
12. 贈与（当事者から関心，愛情，感謝を示し，手助けや贈り物をする事）

7までは介護者側からの働きかけの要素が強く、8～10はより心理療法的であるとされている。さらに11、12は認知症の人から始められ介護者がそれに共感的に応えるものである。

キットウッドが挙げた12の相互行為は主として認知症の人と介護者の二者間の行為として提示されているが、太字で示した行為はそれ以外のさまざまな人々、例えば認知症の人の生活や活動を支える地域住民やボランティアとの関係構築にもつながる。同時にこれらの行為は、音楽、演劇、ダンスなど芸術ワークショップのなかで頻繁にみられるものでもあり、参加体験型の芸術文化活動がこれらの相互行為と近い性格をもつ可能性も指摘できる。

上記の相互行為は、認知症の人「その人」を中心に置いたケアの重要なポイントであるが、現実の介護を担う家族、プロの介護スタッフでもすべてを引き受けることは容易ではない。桜井（2020）は、文化や政治など社会の非経済的な側面が経済に影響を与えているとし「弱いつながりの強さ」仮説を提唱したグラノヴェダーの議論をもとに、支援するためには支援する資源を持つ人々のネットワーク形成が重要であることを指摘している⁹。キットウッドの相互行為が地域社会の構成員であるより多くの人々に開いた形で保障され、多くの人を「当事者」化することが、認知症フレンドリーな地域づくりにつながると考えられる。

4. 芸術文化活動による高齢者への働きかけ（先行事例）

本章では、日本国内で実施されている認知症の人を対象とした芸術文化活動とその成果検証について、先行事例を整理する。認知症の人を含む高齢者を対象とした芸術文化活動は、高齢者施設等でレクリエーション等の一環として行われるもの、文化施設や文化団体から芸術文化活動へのアクセシビリティを保障する意図を持って行われるものなどの例は数多い。ここではそうした活動とは一線を画し、認知症の人を含む高齢者に関連する何らかの変容を明確に意図した活動に限定する。

仙台富沢病院では演劇人による「演劇情動療法」が実施されている。週1回、1時間、10人程度の認知症患者を対象に10分から40分、心が動く物語（実話、小説、落語など）を話し

⁹ 桜井（2020），p229 参照。

て聞かせる。その成果を、喜びや笑いにつながる指標を頻度の多い順に10項目にまとめた歓喜的情動指数によって測定したところ、入院3か月前後の測定値では同指数が上昇、抗精神病薬の使用量は減少傾向を示したと発表されている¹⁰。

一般社団法人アーツアライブは、美術作品の対話型鑑賞である「ARTRIP」を展開し、同活動のエビデンスとして独立行政法人長寿医療研究センターによる成果検証結果（2013年度）をHPで公開している。それによるとうつ軽減と単語記憶力の改善兆候が見られたという¹¹。

大阪に拠点を置く日本センチュリー交響楽団は、2016年度から2年度にわたりブリティッシュ・カウンシルの協力を得てマンチェスター・カメラータ（イギリス）のメンバーを招き、認知症の人を含む高齢者を対象とした即興音楽のワークショップ研修と地域での実践を行った。マンチェスター・カメラータは高齢者対象のコミュニティプログラムに豊富な経験を有するオーケストラとして知られている。日下（2018）はその様子を社会心理学の見地から分析し、参加者の様子やファシリテーターとの関わりについて詳細に記録、成果検証を行っている¹²。

このように認知症の人を含む高齢者に対し、芸術文化活動で積極的に関わろうとする試みとその検証は、近年事例の蓄積が見られるようになりつつあり¹³、一部の事例では、医学的な見地からうつ状態の改善など認知症のBPSDの改善に効果があったと報告されている。その多くは、芸術文化活動のなかでも参加体験型であることは注目に値する¹⁴。

これら先行事例における成果検証は、認知症の人個人の変容に関わるものがほとんどである。一方、活動の対象者とその周囲の人との関係、そして地域づくりにつながる変容についてふれたものは例が少ない。この面での数少ない分析例では、日本センチュリー交響楽団の「お茶の間オーケストラ」の検証から、日下（2018）が「音楽家と高齢者が成長しながら音で楽しむ場の生成プロセスそのものが、世代や価値観の違う人たちの信頼を育み、互いに助け合うコミュニティの形成といえる」のではないかと結論付けている¹⁵。

このように先行研究では、活動が対象者個人、対象者とその周囲の人との関係に及ぼす影響

¹⁰ NPO 法人日本演劇情動療法協会ホームページ参照。 <https://www.jadet.jp/>

¹¹ 一般社団法人アーツアライブ ホームページ参照。 <http://www.artsalivejp.org/>

¹² 日下菜穂子（2018）「音楽による会話『傾聴—共感—共創』のコミュニティ」日本センチュリー交響楽団&ブリティッシュ・カウンシル コミュニティプログラム『お茶の間オーケストラ 2017 高齢者と奏でる音楽』p28-33 参照。

<https://www.century-orchestra.jp/wp/wp-content/uploads/2018/05/64173948bbfb73291a88fc5b9a572073.pdf>

¹³ 最近の動向として、科学技術振興機構の社会技術研究開発センターによるプロジェクトのひとつ「認知症包摂型社会モデルに基づく多様な主体による共創のシナリオ策定」では、医療機関、行政、NPO、大学等が関わり、認知症の人と多様なサービス提供者による共創の場づくりを共創的アート活動の導入によって実現する取り組みを2020年度から開始している。

https://www.jst.go.jp/ristex/solve/project/scenario/scenario20_uchidapj.html

¹⁴ アーツアライブの「ARTRIP」は鑑賞活動であるが、他者との積極的な対話を促す意味で能動的なプログラムといえる。

¹⁵ 日下（2018）p33 参照。

には触れられているが、さらにそこから発展して認知症フレンドリーな地域づくりに必要な「当事者」を増やす活動への道筋は見えていない。認知症に対する正確な知識と認知症の人との弱いつながりをつくることで「当事者」や「他人事にできない人」を増やすことに芸術文化活動は果たして貢献できるのだろうか。

5. 「しろうおカフェおれんじ」における体験型芸術文化活動の取り組み

本章では、認知症カフェで行われている芸術文化活動の事例として、福岡市東区の「なみきスクエア」による「しろうおカフェおれんじ」での芸術体験ワークショップの実施について検討する。

5.1 「なみきスクエア」による「しろうおカフェおれんじ」での芸術ワークショップ

この取り組みは、「なみきスクエア」¹⁶の指定管理者「なみきスクエアみらいネットワーク」（代表企業：(株)JTB）が、社会包摂型文化事業の展開では先端を行くことで知られる岐阜県の可児市文化創造センターalaを模範として2019年度から行っているものである。

福岡市東区の多々良公民館で「ひがしかぜの会」（多々良校区近隣の医療・介護事業所が有志で立ち上げた任意団体）が毎月第4土曜日、1回2時間程度開催している認知症カフェ「しろうおカフェおれんじ」で音楽、演劇などの体験型活動を展開し、並行してプログラム開発と成果検証を継続的に行っている。多々良公民館では毎週1回、コミュニティカフェとして「しろうおカフェ」を開催しており、別途月1回の認知症カフェが公民館等の協力により「ひがしかぜの会」の「しろうおカフェおれんじ」として運営されている。

「しろうおカフェおれんじ」は、認知症の人や家族、地域住民、そして医療・介護の専門職が安心して集い、憩うことができる場として運営されており、コーヒー、紅茶などを無料で振る舞っている。参加者同士の会話ができるほか、認知症に関するミニ講話、専門職による相談コーナー、認知症に関する情報コーナーなどが設けられ、参加費無料、予約不要で参加でき、毎回、20～30名の地域住民等が参加している。2020年度は新型コロナウイルスの影響で4～6月は活動を休止、その後は感染予防対策に万全を期したうえで開催されている。認知症の人や高齢者にとっては外出しづらい環境であるせいか、参加者は以前と比較すれば少なくなっているが、こういう状況であるからこそ人と交流できる場所としての機能を果たすべく開催が継続されている。

「なみきスクエア」は施設設置者である福岡市（東区生涯学習推進課）の協力のもと、2019年度から「しろうおカフェおれんじ」での芸術ワークショップを開始した。この取り組みは社

¹⁶ 所在地は福岡市東区千早4丁目21番45号。設置者は福岡市、所管は東区生涯学習推進課。なみきスクエアホームページ <https://www.namiki-sq.jp/>

会包摂を志向した芸術文化事業であると同時に、福岡市が提唱する「100歳まで生きるのが当たり前になるこれからの時代、市民が支え合いながら、誰もが心身ともに健康で幸せに生き続けられる社会を実現するための具体的な100のアクション＝福岡100」の一環として芸術文化活動が位置付けられることも目指しており、2019年度からの2年間に音楽分野2回、演劇分野2回のワークショップ的活動を行ってきた。

筆者は、この活動に関するコーディネートと成果検証を担当してきた。具体的には、ワークショップを行うアーティストの選定、プログラム設計から当日運営に関わる諸調整、記録、検証等がその役割である。

次節で、実施したプログラムの一例を紹介し、キットウッズのパーソンセンタードケアにおける12の相互行為に照らして分析を試み、参加者個人や参加者同士の関係性の変容、さらに地域づくりにつながる可能性についても探ってみたい。

5.2 演劇ワークショップのプログラム分析

本節では、2020年2月に「しろうおカフェおれんじ」で実施した演劇の手法によるワークショップのプログラムを分析する。この時期、すでに新型コロナウイルスの感染者が福岡市内でも発生しており、諸活動が制限され始めた時期であったため、参加者は8名と少な目であった。なお、「しろうおカフェおれんじ」は地域住民が自由に参加、退出できる場として運営されており、認知症の人、家族以外の参加者もいる。参加者のうち何人が認知症なのか、誰が認知症の人なのかを特定することはできない。また、主催者である「ひがしかぜの会」メンバー以外に、子どもを含む一般の地域住民がボランティアとして関わっている。

ワークショップのファシリテートを担当したのは、福岡県内の演劇人によるユニット「結実企画（むすびきかく）」の3名であった。「結実企画」のメンバーは、これまでも認知症の人を含む高齢者施設利用者を対象とした活動のほか、幼児、フリースクールに通う子どもたち、ホームレス等さまざまな人々との演劇活動に豊富な経験を有している。

以下が当日の活動の記録である。

表1 認知症カフェにおける演劇ワークショップの記録

○概要

実施日時	2020年2月22日（土）14:30～15:40
会場	福岡市立多々良公民館
参加者	近隣在住の高齢者及び家族等8名
アーティスト	結実企画（大福悟〔大福〕、吉柳佳代子〔かよちゃん〕、大西衿沙〔えりさ〕）

○活動の記録

時間	アーティスト	参加者の反応	相互行為
14:30	司会から結実企画を紹介。講師にバトンタッチ。 3名の講師が 自己紹介 。 かよちゃんから、お話。演劇は人間し かしない。生まれて1年くらいでも 「ごっこ遊び」で演劇をしている。布1 枚でも想像力で自分以外のものになれる。	じっと聞き入っている。	
14:37	「手遊び」 手を前に出してグーパー。 親指と人差し指の間を空ける→空ける 位置をずらしていく。 親指を立てる→きつね …「日頃やっていないことをすると脳 が活性化しますよ」「難しい!と思った ほうがいいんです。できちゃった人は これ以上活性化しないので」	うまくできない人もいてざわつく。笑 いが起きる。	リラクゼー ション
14:46	「リトミックスカーフ」 スカーフを配布。好きな色を選んでも らう。「触った感じをどう表現します か?」 スカーフを両手で持ち、手繰り寄せて 手のひらに包み込む。わらべ歌に合わ せてぱっと手を開くと…ひよこが生ま れてくる! 手品のようにスカーフを手の中に詰め 込んでぱっと開く。 そして次は、スカーフなしで何もない 手を開くと…何が出てくる? 想像で できるのは人間だけ。	「しゅるしゅる」「さらさら」「ざらざら」 などの言葉が出てくる。 実際には「スカーフ」だが、「ひよこ」 が見えている? それぞれに想像している。	ティマレー ション
14:56	スカーフ回収。 「ぬいぐるみ」 カエルと鳥のぬいぐるみ が登場。「これは何? 名前は? 2人 の関係は?」 ランダムにぬいぐるみを配布。「名前を つけて。この子の好きなこと、趣味を 一つ考えて」 カップルのやりとりを発見したかよ ちゃん 「お見合いをしましょう。お互いの趣味 を紹介しあって」	「げろちゃん」「ケリー」「どっちも飛ぶ。 飛ぶと跳ぶ」などの声が出る。 いろいろなぬいぐるみが出てくるので、 あちこちで笑いが起きる。渡されたも のを手に取りいじりまわしている。 子どもと大人のペアでぬいぐるみを カップルのように見立てた動きが始ま る。	創造的行為 遊び
15:04	「別な人とも話しましょう」	席が近い2人でぬいぐるみを動かした ながら会話が始まる。	創造的行為 遊び
15:07	「お題からの連想」 「3, 4人でグループになって、連れだっ て遊びに行くならどこがいいか話し 合って。春のお出かけ、どこがいいで しょう?」1分間話した後、各グループ から発表。	高齢男性「この子はケロちゃん。歌い ながらジャンプする」など、高齢者同 士の話も弾んでいる。 ・太宰府（梅見） ・久山（桜） ・舞鶴公園（桜） ・箱崎公園 ・お花見 ・2月25日、太宰府にヨモギ餅を買い に行く ・ハワイの海 ・海の中道	

15 : 12	「春の訪れ」というと？ 「想像力を広げて、イメージできること、思い出すことを教えてください」	<ul style="list-style-type: none"> ・ふきのとう ・散歩中に聞こえるうぐいすの鳴き声 ・咲き始めの桜並木 ・孫の入学式…子どものときは忙しくてよく覚えていないが、孫のときは心の余裕がある ・入学式で校門を並んで通り抜ける ・花粉症と黄砂…去年、シーツを干したら黄砂で汚れて往生した。はたいて取りこんだ。ちゃんととれてないかもしれないが、まあよかたいと、寝た。 ・60年前の自分の入学式で来ていた洋服を思い出した！ ピンクのフランネルのワンピース。60年前よ！ 一生で一番うれしい洋服。かわいかったよー。 ・やわらかい空気と流れる水のやさしさ ・れんげそう…最近見ないね ・沈丁花の香り 	認める
15 : 22	参加者から出て来た「春の訪れ」からイメージしたことを読み上げる。これを脚本家（大福）が練ります。その間に役者がお芝居をします。		
15 : 24	「60年前の入学式」 ピンクのフランネルのワンピースを着た演技をするえりさ。お母さん（かよちゃん）と一緒に入学式に行く場面を即興で演じる。 脚本がまだできないのでお芝居をもう1本。	ワンピースの話をした女性、涙を拭っている。ほかにも泣いている女性がいる。	認める
15 : 28	「ふきのとう」 ふきのとうを演じるかよちゃん。土から頭を出しかけるが、やってきた人間（えりさ）に食べられそうになって… 大福「できたー」	（演技が）うまいねえ、の声。	
15 : 33	参加者の言葉から物語が完成。楽器で効果音を入れながら朗読劇「春の訪れ」として上演（脚本は以下のとおり）。		認める
15 : 40	終了	じっと聞き入り、終わると軽いどよめきが起る。	

* 禁転載 朗読劇「春の訪れ」

春が来る

さあ どこにいこう

大宰府の梅を見にいこうか そうそうあのよもぎもちはそろそろか

久山の桜はもう咲いたかな

舞鶴公園もいい

春はいい ふきのとうの芽吹く力 やわらかい空気に ふっくらした水の流れがやさしい

思い出す 昔住んでた 家の近くの桜並木 散歩してると聞こえてくるウグイスの声

「桜は咲き始めが好き」

「あの淡いピンクが チラチラ見えるのがかわいい」

「そうそう 淡いピンク」

「あなた 小学校の入学式の時 ピンクのワンピース着てたでしょ？ あれ うらやまし
かった」

「おぼえてる 私の一生のうちで 一番の洋服 でも もう 60年も前よ」

「でも 憶えてる だからね 今年は私の孫にピンクのワンピース 着せようと思って」

「あら いいわね」

「いいでしょ ピンクのワンピースに 水色のランドセル」

「まるで 自分が着るみたいに嬉しそう」

「はっくしょん」

「あら 大丈夫？」

「きっと花粉よ」

「春はそんな季節だったわね」

「そうだった 黄砂もいやね」

「あれね シーツをいくらはたいてもおちないの」

「私はあきらめて 砂と一緒にねてるけどね」

「春ね」

「春よね」

孫が真新しいランドセルをしょって 友達と並んで門をくぐる姿を思いうかべ

微笑む二人

いつか 孫たちとハワイに行くことに想いをはせながら

まだちょっと冷たい風の 早春の空を見上げた

春は近いね

このプログラムでは、一緒に行う簡単な手遊び（リラクゼーション）に始まり、スカーフの手触りで感覚的な刺激を提供し（ティマレーション）、徐々に想像力を働かせる活動へといざなっている。続いて行われたぬいぐるみを用いた活動では、ごっこ遊び（遊び）から擬人化したぬいぐるみ同士の関係性や交わされる会話を創作すること（創造的行為）へとつながっている。

「春の訪れ」というキーワードから、これまでに経験した場面の記憶が掘り起こされ、それを語るとファシリテーターや周囲の人々が傾聴し、さらに自分が発した言葉を丁寧に組み込ん

だ「作品」が創作されることで、「かけがえのない存在」として肯定される感覚を得る（認める）ことができている

このようにキットウツの12の相互行為のうち5項目に当てはまることが確認され、特に個人が他者から「かけがえのない存在」として肯定される感覚を持つ場面が多く見られたことがわかる。

また、このプログラム実施後、「しろうおカフェおれんじ」を主催する「ひがしかぜの会」のメンバーから以下のような振り返りコメントが寄せられた。メンバーは会場近隣の医療・介護事業所に勤務する福祉専門職である。

●振り返りコメント（抜粋）

- ・参加者がいい表情で帰っていかれた。
- ・認知症の方は音や動きへの反応がよいので、喜ばれたと思う。
- ・昔のことを思い出し「ああいうのあったね」と言葉が出ていた。
- ・一つの言葉から連想が広がり、思い出したり、涙を流したりしていた。
- ・ぬいぐるみやスカーフでいろいろな広がりがあった。
- ・「参加者」対「演者」、ではなく（全員が）自然体で思いを共有できた。
- ・ピンクのワンピースの話をした方は最近お母さまを亡くされているので、即興のお芝居でお母さんが出て来たのは心が動いたことだろう。今日は帰ってアルバムを整理し思い出したい、と話しておられた。
- ・あちこちのカフェに顔を出している男性の方が「ここはすごくよい」と言っておられた。
- ・こういうことをしていないと衰えるのを止められないね、と言った方がおられた。
- ・お母さんの演技に感動した。
- ・参加者から引き出す手法がよい。進行の技術がすばらしい。
- ・アドリブがすごい。利用者の方への上手な返しの参考にしたい。
- ・（手遊びの）指の動きは難しかった。
- ・ワークショップは、やってみると充実感があるが、参加するには抵抗感がある。（今後の実施について）どこまで人を集めることができるか、懸念がある。

福祉専門職としてこの場に立ち会った人々の感想では、参加者の反応の良さから参加者個人に対するよい影響が相当程度あったと感じられていることがうかがえる。さらに「（全員が）自然体で思いを共有できた」というコメントから、認知症の有無や年齢、立場にかかわらない交流の機会となっていたことも読み取れる。

その一方で、芸術ワークショップの内容をその場にいなかった人に伝えることの難しさから「どこまで人を集めることができるか」という懸念をもち、現実的な場の運営に関わる難しさを感じていることも示唆されている。

以上の事から、このプログラム内容はパーソンセンタードケアに一定程度沿うものになっており、認知症の人たちに対する働きかけとしては好ましいものであったといえる。また、回想法にもつながる内容で、認知症になっても残される大切な記憶を尊重し、参加者全体で認め合う場となっていた。パーソンセンタードケアの考え方や手法を認知症の人と介護者だけでなく、ボランティアや地域住民も含めて互いに「認め合う」つながりの場づくりと捉えなおすことで地域づくりにつながると考えると、このワークショップは参加者本人にとっての意義に加え、一般の地域住民やボランティアを含む参加者同士の交流や関わり合い、認め合う温かい場が形成されており、地域づくりの端緒を拓くものであった可能性が指摘できる。

一方、こうした活動内容をより地域に拡大していくための場の運営に関する難しさも感じられる。地域づくりに踏み込んだ活動へ展開するには、プログラム内容での工夫というより、認知症カフェの運営に関わる人や一般参加者を地域からより多様に集め、認知症の人も含めすべての参加者を「かけがえのない存在」として認め合う場となるよう努めるべきであるが、関係者は参加者集めの難しさも指摘している。

6. 他の地域課題への架橋と文化施設が関わることの意義

このように個人への働きかけから地域づくりへと展開するうえでは、他の地域課題とも絡めたなかで認知症の人や介護する人のサポートを検討するなど、認知症コミュニティに閉じないことも必要ではないか。越智（2016）は、育児マイノリティである多胎児育児者によるピアサポートの場を地域社会と接続するため、多胎児育児の経験のない地域住民にピアサポートメニューを体験してもらうこと、減災ワークショップなど他の地域課題と関係づけた仲間づくりへ展開することの2点を提案している¹⁷。

「しろうおカフェおれんじ」は、公民館で毎週開催される「しろうおカフェ」の特別版ともいえる形で月1回の認知症カフェとして運営されており、必ずしも認知症コミュニティに閉じたものではない。この場に芸術文化活動を加味することで、さらに多様な人々の参加を促す効果も期待できる。特定の課題を抱えた人々をそうではない人々とつなぐ、あるいは他の地域課題に関心を持つ人とつなぐ際に芸術文化を媒介とすることの可能性は検討に値するであろう。芸術文化活動には、楽しく参加でき、多様な人々による交流の場をつくる機能が期待できる。

¹⁷ 越智（2016）参照。

しかし一方で、芸術ワークショップという、参加してみないと内容がわからない活動に、この種の活動の経験が少ない人々をいざなうことは容易でないという難点も指摘できる。

この点については、「しろうおカフェおれんじ」での取り組みが文化施設である「なみきスクエア」が行うことの意味を再確認したい。「しろうおカフェおれんじ」における芸術ワークショップは、「なみきスクエア」が社会包摂と社会的処方にて芸術文化で参画することを意図した取り組みである。地域において誰ひとりとして孤立させない「社会包摂」と、薬ではなく人と交流する場などを「処方」することで人々の困りごとを解決する「社会的処方」の考え方は、地域に密着した文化施設の使命のひとつを果たす重要な概念である。「なみきスクエア」の施設内外で実施している芸術文化イベントと認知症カフェの取り組みをつなぎ、双方の参加者が互いに行きかうような、広報をはじめとする取り組みで側面支援を行うこともできるのではないかな。

認知症カフェは、今後も各地域で運営が継続され、認知症フレンドリーな地域づくりの重要な拠点になると考えられる。こうした場に芸術文化活動が貢献できる可能性の検討や、それにふさわしいプログラム内容の構築、環境整備等は緒についたばかりである。今後のさらなる事例の蓄積と継続的な分析が求められよう。

参考文献・資料

- 藤井昌彦, 前田有作, 金田江里子, 佐々木英忠 (2018) 『認知症情動療法』, 芳林社.
- 星加良司 (2010) (初版第三刷) 『障害とは何か ディスアビリティの社会理論に向けて』, 生活書院.
- 日下菜穂子 (2018) 「音楽による会話『傾聴—共感—共創』のコミュニティ」日本センチュリー交響楽団&ブリティッシュ・カウンスル コミュニティプログラム 『お茶の間オーケストラ2017 高齢者と奏でる音楽』, 28-33.
- 西智弘編 (2020) 『社会的処方 孤立という病を地域のつながりで治す方法』, 学芸出版社.
- 西智弘, 守本陽一, 藤岡聡子 (2020) 『ケアとまちづくり, ときどきアート』, 中外医学社.
- 越智祐子 (2016) 「ソーシャルサポートとしてのピアサポートに関する一考察—育児マイノリティの実践から社会的包摂を展望する—」『名古屋学院大学論集社会科学篇第52巻第4号』, 189-199.
- 桜井政成 (2020) 『コミュニティの幸福論 助け合うこと』, 明石書店.
- トム・キットウッド著, 高橋誠一訳 (2017) 『認知症のパーソンセンタードケア 新しいケアの文化へ』, クリエイツかもがわ.
- 矢吹知之, ベレ・ミーセン (2018) 『地域を変える 認知症カフェ 企画・運営マニュアル』, 中央法規.